

## 松島のみどころ

2004年8月31日 安倍富士男（盛岡白百合学園高校）  
URL <http://abe.ihatov.jp/>  
メール [abe@morioka-shirayuri.morioka.iwate.jp](mailto:abe@morioka-shirayuri.morioka.iwate.jp)

（この文書の生い立ちと性格）

松島のみどころはいろいろありますが、ここでは1689年に松尾芭蕉が松島に来ているので、芭蕉と一緒にたどることにしたいと思います。もともとは、私が2001年に参加した「松尾芭蕉 奥のほそ道遠隔共同授業」で、私から岐阜の中学生に向けて提供した松島の資料が元になっています。それは、<http://abe.ihatov.jp/basho/matsu/matsu.html>で今でも見ることができます。

ホームページの階層が深いので、誰も見る人はいないと思います。しかし資料としては一読の価値があると思うので、改めてここで松島を訪れる皆さんが印刷して持って歩けるように今回pdfファイルとして再構成しなおしました。また直接松島を訪れる前に、ぜひ上記サイトで机上で時空を超えた旅行を楽しんで下さい。きれいな写真が沢山あります。

私の経験では、松島に資料を持たずに行ってもあまりよくわかりません。もちろん、地元の人（私のこと）でも松島を詳しく語ることはできません。それほど、歴史が長く奥が深いのです。残念なことに、観光案内所に行っても歴史を簡単にまとめた無料の適切なパンフレットはありません。

それで、松島のことを一部ですが、詳細な解説をつけてみました。また私の見た松島、私から見た奥のほそ道解釈も掲載しました。ごらん頂ければ幸いです。

ここで解説している主なキーワードは、  
松尾芭蕉「奥のほそ道」松島の鑑賞、  
瑞巖寺の歴史、  
霊場雄島

歴史上の人物では、  
能因法師  
西行  
見仏上人  
頼賢と頼賢碑  
雲居禅師  
北条時頼  
法身（真壁平四郎）  
伊達政宗

です。他にも見どころは次のようなものがありますが、割愛します。

福浦島（植生が面白い）  
五大堂（807年坂上田村麻呂將軍の毘沙門堂に由来 その後慈覚大師が開基）  
観欄亭（伊達政宗が秀吉から譲り受けた桃山文化の建築、もとは、京都の伏見城にあったものを江戸に移築した。その後、松島に再移築）  
富山観音（坂上田村麻呂將軍）  
松島水族館（修学旅行の定番コース マンボウとラッコで有名）  
お土産（カキが有名です。残念ながら取り上げませんでした。）

使用した文献は多岐にわたりますが、一番使ったのは松島町発行の松島町誌資料編と瑞巖寺発行の「瑞巖寺の歴史」です。前者は、松島町役場に勤務するいとこの丹野茂さんから提供を頂きました。

## 松島の旧跡名跡概念図

黄色の線が、芭蕉と曾良の旅程図。塩釜から船で棧橋に上陸し、瑞巖寺、五大堂、雄島を見て、松島に一泊した。その後、旧道（金華山街道）を通過して、高城（たかぎ）、小野、矢本を通過して石巻まで向かった。



## 松尾芭蕉「奥のほそ道」 松島の段 原文

そもそも、ことふりにたれど、松嶋は扶桑（ふそう）第一の好風にして、およそ洞庭（どうてい）・西湖（せいこ）を恥ぢず。東南より海を入れて、江の中（うち）三里、浙江（せつこう）の湖（うしお）をたふ。嶋嶋の数を尽して、欵（そばだつ）ものは天を指し、ふすものは波に葡萄（はらば）ふ。あるは二重（ふたえ）にかさなり三重（みえ）に畳（たた）みて、左にわかれ右につらなる。負（おえ）るあり抱（いだけ）るあり、児孫愛すがごとし。松の緑こまやかに、枝葉（しよう）夕風に吹たはめて、屈曲おのづからためたるがごとし。その気色（けしき）えん然として美人の顔（かんばせ）を粧（よそお）ふ。

ちはやぶる神のむかし、大山（おおやま）ずみのなせるわざにや。造化（ぞうけ）の天工、いづれの人か筆をふるひ詞（ことば）を尽さむ。雄嶋（おしま）が磯は地つゞきて海に出た

る嶋なり。雲居禪師（うんごぜんじ）の別室の跡、坐禅石（ざぜんせき）など有。将（はた）松の木陰に 世をいとふ人も稀稀（まれまれ）見え侍りて、落穂（おちぼ）松笠（まつかさ）など打（うち）けぶりたる草の庵、閑（しずか）に住（すみ）なし、いかなる人とはしられずながら、先（まず）なつかしく立寄ほどに、月、海にうつりて昼のながめ又あらたむ。江上（こうじょう）に帰りて宿を求（もとむ）れば、窓をひらき二階を作て、風雲の中に旅寝するこそ、あやしきまで妙（たえ）なる心地はせらるれ。

## 松嶋や鶴に身をかれほとゝぎす

曾良

予は口をとぢて眠らんとしていねられず。旧庵（きゅうあん）をわかるゝ時、素堂（そどう）松嶋の詩あり。原安適（はらあんてき）松がうらしまの和哥（わか）を贈らる。袋を解（と）きてこよひの友とす。且（かつ）杉風（さんふう）濁子（じょくし）が発句（ほっく）あり。

### 瑞巖寺

十一日、瑞岩寺（ずいがんじ）に詣（もう）づ。当寺三十二世の昔、真壁（まかべ）の平四郎（へいしろう）出家して、入唐（にっとう）帰朝の後開山（かいざん）す。その後に雲居禪師の徳化（とくげ）に依（より）て、七堂薨（いらか）改（あらたま）りて、金壁莊嚴（こんぺきしょうごん）光を輝（かがやか）し、仏土成就（ぶつどじょうじゅ）の大伽藍（だいがらん）とはなれりける。かの見仏聖（けんぶつひじり）の寺はいづくにやとしたはる。

（以上の文は、京都大学木越治先生のデータベースを基に、安倍が読みやすく改変している。）

## 松尾芭蕉「奥のほそ道」 松嶋の段 現代語訳（安倍訳）

（松嶋の風景について）

本当に今までいるんな人が言ってきてはいることだけれども、やっぱり松嶋は日本でも一番の景色で、有名な中国の洞庭湖や西湖に比べてもまったく遜色がないと思った。

（島の形について）

東南の方向より、海が入り込んでおり、入り江の中は、三里ほど、あの中国の浙江のように潮が満ちてとても美しい。島の数は数えきれないほどあり、（その島の形と言ったら）高いものは、大空に向かってそびえ立っており、また平べったいものは、波の間にはらばい

なっているように見える島々が二重・三重に重なって見えているものもあるかと思えば、その重なって見えているものでさえ、左側の島に離れながらも右側の島に連なって見えたりして（本当に絶妙の

バランスとしか言いようがない。）島の大きさには大小があって、人を背負っているような形のものもあれば、また抱っこしているようなものもある。まさに子供をあやしているような感じさえする。（松の様子について）

松の緑は濃く、枝葉は潮風を受けてすっかり曲がってしまっているが、その曲がりようと言ったらまるで松の木に意識があって自分から曲がっていったかのように、美しく屈曲している。

その松の木の景色の思わせぶりなことと言ったら、ちょうど美しい女性が化粧をした時の顔のようだ。（再び松嶋の景色について）

この景色をお造りになったのは、神々が生きていた大昔に、山岳の神である大山祇（おおやまずみ）の神が行った仕業だろうか。

そうした万物をお造りになった神々の業（わざ）であるこの景色の美しさは、どんなに文章が上手な人でも言葉で表現できるだろうか、いやできはしまい。

（雄島について）

雄島の磯はこちら側と陸続きになっているが、海に突き出た島である。

瑞巖寺中興の祖と言われる雲居禪師（1659年没）の別室である坐禅堂の跡や坐禅石がある。

また松の木陰には、世の中の喧騒を逃れて道を求める人々の姿も所々に見ることが出来る。

落ち穂や松かさなどを燃やした煙の立ちのぼっている草の庵には、閑かに人が住んでいる様子であるが、一体どんな人が住んでいるんだろうと興味もわいてくるので、心惹かれて立ち寄ったりしているうちに、月が海に映っており、（その様子は）昼の眺めとはまた違っていて趣のあるものだった。

（松嶋の宿について）

松嶋湾に面した場所に戻ってから、宿を探してみたら、窓を海の方へ向けている二階建ての作りの宿だった。今こうして寝床のある部屋から（あこがれていた）松嶋湾を眺めているのは、なんだかとても不思議な感じがして、神妙な気持ちになるのだった。

## 松嶋や鶴に身をかれほとゝぎす

曾良

古人は、「千鳥も借るや鶴の毛衣」と言っている。そうなのだ、この日本一の絶景松嶋においては、ホトトギスよ、おまえも美しい鶴の身を借りて、松嶋の島々を飛びわたれ

私は、松嶋のすばらしさを目の当たりにして句を作ろうとしたがよい句が出ず、眠ろうとしても眠ることはできなかった。

江戸で以前に住んでいた芭蕉庵を出て来る時に、餞別として、弟子の素堂からはここ松嶋の詩を、原安適からは、松が浦島（近くの宮城県七ヶ浜 古来より歌枕）の和歌を贈ってもらった。

荷物袋の中から、これらの詩歌を取り出して、眠れないので今宵の友とした。それから、袋の中から、杉風と濁子の松嶋の発句も見つけた。うれしかった。

（瑞巖寺について）

瑞巖寺

十一日に瑞巖寺に参詣した。

このお寺は、今から三十二世の昔、真壁平四郎 (= 法身性西 ほっしんしょうさい) が出家して、唐に渡り、日本に戻ってきてから開山した寺である。その後、雲居禅師の中興により、七堂の建物も改修されて立派になり、その様子は金壁荘厳、光輝くようであり、仏の世界をこの世に完成させたような大伽藍となった。あの霊験あらたかな見物上人のお寺はどこにあるのだろうか。ぜひ行ってみたいと思った。

## 松尾芭蕉「奥のほそ道」 松島の段 作品解説(安倍)

### (一) 松島の始まりの部分について

文学者・作家の中には、「中国の洞庭湖や西湖と比べるとは芭蕉は行ったことがないからそんなことが言えるのであって、中国一の景色とは松島は比べるべくもない」という論がある。例えば(奥の細道 富士正晴 学研 65ページ)や(おくのほそ道行 森本哲朗 87ページ)である。しかし、私は違うと思う。実物の洞庭湖や西湖ではなくて、イメージ上のそれらと比較した結果なのだと思う。実物は確かに見てはいないけれども、洞庭湖や西湖を李白・杜甫がいかにかに愛し詩に詠んだかが芭蕉にとっては大事なのであって、地理的な意味での、洞庭湖や西湖がどれほど規模が大きくすばらしいかはほとんど重要ではないように思う。

問題なのは、芭蕉という芸術家の心象に映った松島であり、イメージの洞庭湖や西湖なのだ。松島が芭蕉にとって、今回の奥の細道を象徴するとともに大事な場所な場所であるのは、旅立ちの章で他の地名は一切あげていないのに、「松島の月まづ心にかかりて」と述べていることから察することができる。なぜこれほどまでに松島にあこがれているのであろうか。3つ考えられる。

1つには、いろいろな人が言っているように、古来松島は歌枕として有名であり、その有名さは京都や江戸にも知れ渡っていた。例えば誰でも知っている有名な作品としては次のようなものに松島がすでに掲載されている。

### 古代・中世の文書記録(松島町史資料編より引用)

都のつと 宗久の著 1350年頃の紀行文

今物語 鎌倉時代の説話集 1239年以後の成立 松島上人(見仏上人の記述が見られる)

撰集抄 鎌倉時代の仏教説話集 1250年前後の成立 松島上人の記述あり

沙石集 鎌倉時代後期の仏教説話集 1283年の成立 法身上人の記述あり

### 古代・中世の和歌の部(主要なものを抜粋)

蜻蛉日記 974年 松島の風にしたがふ波なれば 寄るかたにこそたちまさりけれ

枕草子 清少納言 1000年以後

島は、浮島、八十島、たはれ島、みづ島、松が浦島、まがきの島、(略)

源氏物語 紫式部 1021年

松島のあまの濡れぎぬなれぬとて ぬぎかへつてふ名をたためやは

新古今和歌集 1205年

こころある雄島の海人のたもとかな 月やどれとはぬれぬものから 宮内卿

西行上人集 1190年

まつしまやおしまの磯も何ならず ただきさかたの秋の夜の月

二つ目は芭蕉の心象風景、心的イメージとしての松島は、洞庭湖や西湖よりもはるかに美しかった、と考えられるからだ。実際に私も松島の観欄亭や瑞巖寺宝物館の資料を見て、感じたことであるが、芭蕉の時代後に出てはいるが、松島を景勝地として紹介した図版の美しいこと、筆の絶妙なことと言ったら、それはまったく素晴らしいものであった。たぶん、芭蕉の同時代人たちもこうした絵のイメージを持っていたのだろう。私は実際の松島を子供のころから眺めて来ているので、それらが、どれだけ実際よりもはるかに素晴らしく美しく描かれているかを知ることができる。

私は実物の松島は日本一美しいなどとは思っていないが、版画や紀行文の世界の松島は「行ってみたいな」

「きれいだなあ。まるでおとぎの世界のようだ」と感じる。こうした世界の頼賢碑などは、巨大な粘板岩に

大きな梵語が彫り込んであって、オーラを発しているようだった。(それにしても現代の我々が、この素晴らしい

頼賢碑を実際にはもちろん、図版でも目にすることができないのは非常に残念だ。)

こうした図版集あるいは紀行文を眺めていれば、風流を解する人なら誰しも素晴らしい心的実在としての

イメージを持つに違いない。芭蕉以後に発行された松島の図版・地誌(松島町史資料編より引用)どれも素晴らしい絵のできである。

松島諸勝記 1716年 夢庵如幻(瑞巖寺6世)松島の名勝を文章で紹介した最初のもの

松島図誌 1820年 桜田欽斎

奥州名所図会 大場雄渚

塩松勝譜 全20巻 舟山万年

奥羽観蹟聞老志 全18巻 1707年 佐久間洞巖

芭蕉以前の紀行集(たぶん、芭蕉はこうした文献をすべて見ていたと思われる。特に松島一代記の宗因は俳諧の先輩にあたる。また、大淀三千風(おおよどみちかぜ)は、俳諧でも名の知れた人であり、芭蕉より4つ年長。仙台では三千風の世話になろうと考えていたようだったが、対面できなかった。

伊勢の出身で仙台俳壇・文芸の大御所西鶴は芭蕉のライバル。西鶴は俳諧師としても有名だった。

金銀島探検報告 1611年 スペイン大使セバスチャン・ビスカイノ

日本国事跡考 寛永20年 林春斎(林羅山の三男) 松島が天野橋立、巖島神社とともに日本三景と最初に呼ばれた。

松島一見記 1661年 西山宗因 西山宗因は江戸前期の連歌師・俳人で談林派の祖。弟子には井原西鶴がいる。

松島眺望集 1682年 大淀三千風 この紀行文により松島が多くの人に知られるようになったと言われている。

好色一代男 1682年 井原西鶴 浮世草紙作家・俳人 松島・塩釜の記述あり

一目玉鉾 井原西鶴 西鶴の地誌。塩釜から石巻までの細かい記述あり。

その後1689年 芭蕉、松島を歩くことになる。

三つ目には、エキゾティズム(異国情緒)が、このイメージを増幅している。芭蕉は、まだ見ぬ東北地方に対して限りないエキゾティズム(異国情緒)を感じている。数々の歌枕、そして能因法師(のういんほうし) 歌人西行、義経などが惹かれて旅した東北の地。歌枕でふくらんだイメージはこうした敬愛する人たちによって限りなく増幅されたに違いない。

芭蕉に「奥の細道」に旅立つきっかけを与えたと思われるもの

1 能因法師の歌の旅 1050年頃 陸奥の国へ

2 西行法師の歌の旅

1度目の陸奥への旅 1150年頃 26歳から31歳の間 陸奥へ修行のために出る

2度目の陸奥への旅 1189年 西行69歳 6年前(1180年)に平重衡の南都焼き討ちによって失われた東大寺再建のために、奥州の藤原秀衡に砂金の勧進を依頼するために伊勢を出発。この勧進を西行に依頼したのは重源上人。この辺りの事情は、「西行・山家集 井上靖著 現代語訳日本の古典9 学研」、「大仏建立物語 神戸淳吉著 小峰書店」に詳しい。

3 義経の平泉落ち

1回目 1174年 牛若丸16歳、金売り吉次に誘われて京都鞍馬寺を出る。奥州街道を通る。

2回目 1186年 北陸街道を通過して、京都から北陸道(途中から奥州街道)を山伏姿で平泉へ。「義経記 古典文学全集16 ポプラ社」と「東北の街道 渡辺信夫著」を参照

まとめ

以上のことから、冒頭の松島と洞庭湖や西湖を比較した文章に関して、「芭蕉は大げさに表現したのではなく、イメージとしての松島とイメージとしての洞庭湖・西湖はまったく互角の美しさだったの

だろう」という見解を論拠を示して述べた。それから、この冒頭の部分であるが、似たような文がそれ以前にあって1608年に虎哉和尚の撰文による瑞巖寺梵鐘「鐘之銘」の漢文「けだし松島は、天下第一の好風景にして、瑞巖は日本無双の大伽藍なり。」があり、そして1682年に大淀三千風は「松島眺望集」の中で上記の虎哉和尚の文を紹介しているし、また冒頭の箇所では、同じような表現を用いて松島を紹介している。「ソレ松島ハ、日本第一ノ佳境ナリ。四囲皆山ナリ 山間皆海ナリ。」このような文章がすでにあったので、芭蕉は「そもそもことふりにたれど」(かなり言い古されていることではあるが)と前おきをおいてから、あの名文を始めたのであろうと言われている。(奥の細道ハンドブック 久富哲雄 109ページ)

## (二) 雄島

雄島とは松島水族館の裏側へ約200㍍行ったところにある、松島湾に浮かぶ島の1つ。ただし陸地と非常に近いために小さな橋(渡月橋)がかけてある。芭蕉の陸続きというのは、創作である。東西は40㍍、南北に200㍍に満たない小さな島。表記法は、「おしま・をしま・小島・雄島・御島」などがある。雄島は、松島を代表する歌枕で、古来より非常に多くの和歌に詠み込まれている。

雄島の登場人物紹介

1104年 見仏上人、伯耆(鳥取県)より来て、雄島妙覚庵に住む。(見仏上人)

1119年 鳥羽院、見仏上人に本尊と千本の松を賜う。(千松島のおこり)

1199年 北条政子、見仏上人に舍利を寄進。頼朝の冥福を祈らせる。

1280年 一遍上人、松島を訪れる。

1285年 頼賢、雄島妙覚庵に住む。

1300年 天龍寺開山夢窓疎石、松島を訪れる。雄島で頼賢に会う。

1307年 雄島に頼賢碑建つ。(頼賢碑)

1613年 正宗没。雲居禅師、松島に来る。入寺。第99世。雲居、正宗の百箇日忌を営む。(雲居禅師)

1637年 雄島に把不住軒(雲居の坐禅堂)建つ。雲居の願いにより五大堂は瑞巖寺に帰属することとなる。

1659年 雄島に松吟庵建つ。

## (三) 見仏上人

雄島の有名な話としては、まず見仏上人（けんぶつしょうにん）がいる。見仏上人は1104年に伯耆の国から来松し、雄島の妙覚庵（みょうかくあん）に入った。以来、一步も島を出ることなく、12年間ひたすら法華経を読誦した。鬼神を使いこなし、その法力を遠く京都まで示した超能力者であったという。その法力に感じた鳥羽天皇から、姫小松一千本が下賜された。このことから雄島は千松島（ちまつしま）、御島（おしま）とも呼ばれるようになったという。なお、見仏上人は瑞巖寺（当時の延福寺）の住職ではないから、芭蕉も「あの有名な見仏上人のお寺はどこだろうか」と探している。

#### （四） 見仏上人と西行の関係 西行戻しの松

西行法師の物語を集めた「撰集抄」に次のような話がある。西行が能登の国（石川県）で一人の僧と出会った。その僧は「月のうち20日は松島で暮らし、あとの10日はここで暮らす」と言った。西行が松島にたどり着いた時、能登で出会った僧は、すでに松島で暮らしていた。

そして一緒に暮らすうち、やはり10日間は姿が見えなくなっていたという。その僧こそが見仏上人で日夜法華経を読誦して超能力を身につけ、鬼神を使い、瞬時にして空間移動をしたという。

西行法師が、松島に本当に来たのかどうかは、どうも定かではないようだ。どの数冊に当たって見たのだが、それらしきことは、書いていない。伝説なのだろう。伝説に基づいて松島には「西行戻しの松」がある。

#### （五） 頼賢と頼賢碑

この見仏上人の徳を慕って、妙覚庵を継いだのが頼賢（らいけん）で、1285年に入ると以後22年間島から一步も出ずに修行をしたので、見仏上人の再来と言われたという。また1300年には、世界遺産に登録された嵐山の天龍寺の開山夢窓疎石（むそうそせき）が頼賢と松島で出会っているのは興味深い。

その頼賢の徳をしのぶために、1307年に頼賢碑が建てられている。碑文は鎌倉建長寺の唐僧一山一寧という有名な人の撰文だという。確かに頼賢碑の拓本を見ると、碑の周囲には、よくラーメンどんぶりにある渦巻き模様（唐草模様？）がしっかりと彫り込まれていて、和風でない、不思議な感じのする碑である。

#### （六） 雲居禅師の坐禅堂（把不住軒）

芭蕉が他に指摘しているのは、瑞巖寺中興の雲居禅師（うんごぜんじ）の坐禅堂（把不住軒 はふじゅうけん）の跡と坐禅石である。芭蕉が心惹かれて立ち寄りたりしている「草の庵」とは、松吟庵

のことなのであるが、これがなかなか複雑なので整理して書くと、次のようになる。建てられてから30年も経っているので相当風雪にさらされて草の庵になっていたのだろう。

1104年 妙覚庵に見仏上人入る（初代の妙覚庵＝見仏庵は島の北側にあった）

1285年 頼賢、妙覚庵を継ぐ。（頼賢の継いだ妙覚庵は島の中央にあった）

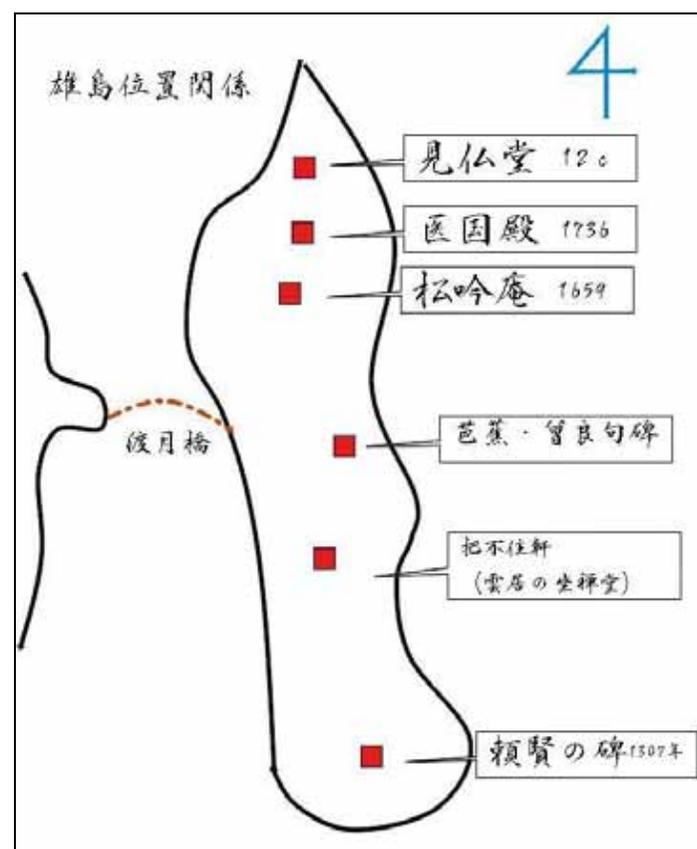
1637年 把不住軒（雲居の坐禅堂）これも島の北側にあったのだが、現在は島の南側に骨格が残っている。

1659年 松吟庵が頼賢の妙覚庵跡（つまり島の中央）に建てられる。

1689年 芭蕉、雄島に来る

つまり、この松吟庵を見ているうちに、松島湾に月がかかってきて、その美しさに感慨を催しているのである。実際に見仏上人は「月まつしまの聖」と呼ばれているし、芭蕉も松島の海に浮かぶ月を見たくて「奥のほそ道」の旅に出ているわけなので、ここはまさに念願がなったクライマックスのシーンであると言える。

#### （七） 雄島概念図と碑文位置関係



copyright 安倍

## （八） 瑞巖寺について

次に芭蕉は瑞巖寺のことを述べている。そこで「真壁平四郎（まかべへいしろう）」「雲居禅師」をキーワードにして瑞巖寺のあらましを確認したい。

瑞巖寺は開山から実に2度寺名を変えている。また、宗派も変えている。それぞれの変化にはおおきな事件が起きているので、それにも注目してみたい

### （八の一） 天台宗延福寺時代

828年 円仁（慈覚大師）開山。寺名を延福寺とする。天台宗として出発。

寺社は普通、権力者の庇護の基に置かれるのであるが、この時は、平泉の藤原氏の庇護を受けていたらしい。しかし、1189年に源頼朝が奥州藤原氏を滅亡させたので、それ以後は鎌倉幕府の庇護を受けることになる。この延福寺時代400年間の有名な出来事は、すべて雄島を中心に行われている。見仏上人の超能力、鳥羽天皇の1千本の松、北条政子の仏舍利寄進などが重大事件である。

### （八の二）北条時頼と法身の出会い 天台宗から臨済宗へ宗派替え

1248年事件発生。 時の執権北条時頼が旅の行脚僧の姿で松島に来た。その日はちょうど延福寺の鎮守のお祭りで神輿担ぎ等にぎわっていたのだが、見物していた時頼は「前代未聞の見物哉！」と大声で叫んで、祭りを台無しにしてしまった。怒った荒法師たちは、刀やなぎなたで行脚僧を殺そうとするのだが、亀崎の良泉坊が「今日は祭りだから」と止めにはいったすきに逃げたという。

その日に行脚僧は瑞巖寺境内の法身窟に宿を求めた。中には先客があり無学文盲の禅僧法身性西（ほっしんしょうさい）であった。その法身窟の中でいろいろと会話がなされていくうちに、時頼は法身の禅僧としてのすばらしさに打たれた。鎌倉に帰った時頼は、三浦小次郎義成にすぐさま1千の兵を与えて延福寺の約1千名の天台僧を追放した。この一部は松島湾に浮かぶ福浦島に逃れたといい、また経文はすべて経ヶ島で焼かれたという。以上は天台記の記述。その後、時頼は、岩窟の僧を捜し出して新しく円福寺と名を改めた寺の住職とした。この時から、瑞巖寺は円福寺という臨済宗の寺として生まれ変わることになり、北条氏の庇護を受けることになった。

なお、この北条時頼という人は、熱心な臨済宗の支持者として有名で、宋の名僧・蘭溪道隆を招いて、鎌倉に建長寺をたてたりして禅宗を保護する一方で、強硬な日蓮のような人物はさっさと捕らえて伊豆に流刑にしている。日蓮は時頼に「立正安国論」を提出して法華経で国を治めるように進言したり、「禅は天魔がなり」といって他宗への攻撃をばげしく行った。こうした流れの中でみると、延福寺の天台宗から臨済宗への改宗もよく理解できる。なお、このあたりの鎌倉幕府の成立と終焉は以下のサイトに手際よくまとめられているので、そちらをご覧ください

<http://www17.freeweb.ne.jp/area/bame/kaareki.htm>

### （八の三）法身（真壁平四郎）とはどんな人？

この法身の経歴は次のようである。

法身の俗名は、真壁平四郎といい常陸の国真壁郡猫島村の出身。人生の前半生は領主真壁時幹（ときもと）に使える従僕であった。ある寒い日のこと、主人のお供をしていた平四郎は、ご主人様が帰る時に、履き物を差し出した。履き物が冷たくならないように暖めていたのだった。しかし、これを訝しく思った主人時幹は、「さては、さむいからといって、私の履き物を尻に敷いていたな。」と激怒し、脱捨てた履き物で平四郎の額を思いきり殴りつけた。平四郎は昏倒して倒れ、しばらくして起きあがると、割れた履き物が転がっている以外に、辺りには誰もいなかった。その履き物を懐に入れて、平四郎は真壁を後にした。

俗世間がつくづくいやになった。鎌倉・高野山・比叡山に登って仏教の道に入ろうとしたのだが、文盲だったために、天台宗や真言宗の密教は学問やきまりが難しく理解できなかったがっかりしていた平四郎に朗報が届いた。禅は難しい学問をしなくても悟りが開ける、そう聞いた平四郎は、宋の国にある径山寺（きんざんじ）の仏鑑禅師のもとで修行をすること9年、悟りをひらいたのちに帰国した。

帰国して、しばらくは姿を隠していたのだが、この径山寺の仏鑑禅師門下には中国や日本からすぐれた僧が学びにきており、北条時宗の帰依を受けて鎌倉に円覚寺を開いた中国僧の無学祖元、来日にして建長寺二世となった。兀庵普寧（ごったんふねい）は直接の門下であり、建長寺の開山、蘭溪道隆は径山寺で青年時代を過ごしている。そうした名僧などには、法身の所在は確認されており、時頼に報告されていたらしいのである。

### （八の四）臨済宗 円福寺時代 隆盛から没落へ

従って、臨済宗としてのお寺円福寺は、1259年の法身を開山とするのである。その次に住職となったのは、鎌倉建長寺の蘭溪道隆であった。その後、円福寺は、順調に発展し、4世から7世のころまでがピークであったという。（「瑞巖寺の歴史」によれば、その様子は一遍上人絵詞伝や歌僧宗久の「都のつと」等で知ることができるとのことであるが、残念ながら角川と平凡社の二系統の一遍上人絵詞伝にあたってみたのだが、松島の情景を描いたページを発見することができなかった。）

しかし、南北朝の動乱が60年も続いたため、人々も円福寺も次第に勢力を弱めていった。伊達政宗の師、虎哉禅師（こさい）が訪れた時には、幽霊屋敷同然のようになっていたという記述が残っている。

### （八の五）臨済宗 瑞巖寺時代 雲居禅師とはどんな人？

伊達家はもともと禅宗の信仰が厚く、身内から僧侶となるものもあったほどである。仙台に青葉城を構えてから、師の虎哉（こさい）和尚のすすめで正宗は、円福寺の復興造営に力を注ぐ。こうして

1608年（竣工の前年）に名前を瑞巖寺としたのである。

瑞巖寺初代の住職には、陽岩宗純（ようがんそうじゅん）が就任したが、建物の完成を見ずに1608年に亡くなっている。その後、越前の国から海晏道陸（かいあんどうりく）が就任した。しかしこの後、住職になるものの寿命が短かったりして、5年、あるいは10年と住職不在の時代があった。

1636年に正宗は亡くなるのであるが、死を察した正宗はなんとかして瑞巖寺の住職不在を解決したいと願っていた。そこで、瑞巖寺で修行中の25歳の若者、東初（とうしょ）に目を付けた。この若き修行僧は大変優秀であったが、年齢が若いことを理由に断った。その代わりに東初は、後水尾帝（ごみずのおてい）の何度にも渡る頼みを断り続けている名僧、雲居を推薦した。

正宗は、使者を2度も派遣したが、雲居に断られた。ますます気に入った正宗は3度目の使者として東初を派遣した。その間に正宗は70歳で亡くなってしまった。

伊達家2代目の忠宗は正宗の要望をかなえるべく、「松島に来てくれないのならば、瑞巖寺を他宗としてしまうぞ」という不退転の決意を持って懇願して、ようやく雲居は承諾することになった。

瑞巖寺に入った雲居は、それまでゆるんでいた寺の綱紀肅正に努め、また自ら率先して雲水たちと寝起きをともにして、禅寺の謹厳な雰囲気醸し出したという。また全国から名声を聞きつけて集まった雲水で、瑞巖寺は収容しきれなくなる程で門の下や洞窟で寝起きするものさえ出るほどだったという。また瑞巖寺だけでなく忠宗や正宗の正妻である陽徳院田村氏の庇護を受けたこともあり、伊達領だけでも17寺の開創、中興を行った。全国では173ヶ寺の開創・中興を行っている。

こうした活躍に対して後光明天皇から「慈光不昧禅師（じこうふまいぜんじ）号」が贈られた。また人材育成もすぐれており、弟子達の中でも嗣法の弟子が15人。そのうち5人が賜紫（しし）、つまり天皇から紫の衣を頂くという僧侶の最高榮譽者となっている。

また雲居禅師は様々な逸話が沢山のこっていることから、皆に愛されたことがわかる。雄島では幽霊に引導を渡した、干ばつの雨乞いのために北条政子から頂いた仏舎利を海中に投じた話、栄養不足からの一時的な失明を飲酒して直した話等数に限りがないほどである。

また、庶民に禅宗の教えをわかりやすく説いた歌念仏、往生要歌（おうじょうようか）を広めたことや（これはあとで宗教上の問題に発展するのであるが）、弟子に対する指導は懇切丁寧に行ったこと。書の腕は、後に500年間出（つまり1千年間にただ一人）で日本臨済禅中興の祖と言われている白隠禅師が若いころ、雲居の書を見て、修行をおろそかにしていたことを改めさせた程の腕前だったといわれている。

このようであるから、当時江戸にいた芭蕉にもその名前が聞こえないはずはなかったと思われる。1689年に松島に来た芭蕉であるから、1609年に竣工した瑞巖寺はさぞ荘厳で華麗だったにちがいない。その間はちょうど80年である。

#### （八の六）瑞巖寺の造営に関して

材料は、紀州熊野山中から海上16艘のいかだを組んで運んだ。大工は京都から梅村彦左衛門家次一

家を招へいした。また梅村は紀州から当時、日本一の大匠と言われた刑部鶴左衛門（おさかべつるざえもん）を招いた。1604年に正宗自らなわばりを張って工事を開始したという。また「棟や床にあがるときは草鞋をはきかえよ」とか、「釘・かすがいでも、まちがっておとしたら二度と使用してはいけない」等と相当気合いを入れて造営に取り組んだらしい。

何と云っても、200を越える大名中、第3位の大大名である。絵師は仙台藩お抱えの絵師、佐久間修理（しゅり）。他に有名な文王の間、上段、上々段の部屋の制作は、長谷川等胤（とういん）である。

#### （九）松島年代記（「瑞巖寺の歴史」より芭蕉に関連する部分のみ抜粋）

- 782～805年 坂上田村麻呂、富山に観音堂を開く。
- 807年 坂上田村麻呂、五大堂島に毘沙門堂を建てる。 （五大堂のおこり）
- 828年 慈覚大師、延福寺（瑞巖寺のはじまり）と五大堂を開創する。
- 1104年 見仏上人、伯耆（鳥取県）より来て、雄島妙覚庵に住む。 （見仏上人）
- 1119年 鳥羽院、見仏上人に本尊と千本の松を賜う。 （千松島のおこり）
- 1189年 源頼朝から義経調伏の御教書下る。奥州藤原氏滅亡。
- 1199年 北条政子、見仏上人に舎利を寄進。頼朝の冥福を祈らせる。
- 1248年 北条時頼、僧体して松島に来る。法身と邂逅する。 （法身窟）
- 1249年 時頼、延福寺を滅ぼす。名前を円福寺とし將軍家御祈願寺とする。
- 1280年 一遍上人、松島を訪れる。
- 1285年 頼賢、雄島妙覚庵に住む。
- 1300年 天龍寺開山夢窓疎石、松島を訪れる。雄島で頼賢に会う。
- 1307年 雄島に頼賢碑建つ。 （頼賢碑）
- 1333年 鎌倉幕府滅ぶ。
- 1567年 伊達政宗、米沢に生まれる。
- 1578年 円福寺、建長寺派から妙心寺派となる。
- 1593年 伊達正宗、朝鮮出兵から臥龍梅を持ち帰る。
- 1600年 伊達政宗、仙台を治府と定め、青葉城の普請にかかる。
- 1605年 伊達政宗、五大堂を造営。円福寺造営。
- 1609年 瑞巖寺上棟する。正宗、紅白梅・松を手植えする。 （瑞巖寺の臥龍梅）
- 1611年 スペイン大使ビスカイノ松島訪問。
- 1615年 大阪夏の陣。豊臣氏滅ぶ。
- 1613年 支倉常長、イスパニアに向けて牡鹿半島の月の浦を出航。（瑞巖寺のクリスタルガラス）
- 1613年 正宗没。雲居禅師、松島に来る。入寺。第99世。  
雲居、正宗の百箇日忌を営む。 （雲居禅師）

1637年 雄島に把不住軒建つ。雲居の願いにより五大堂は瑞巖寺に帰属することとなる。

1644年 芭蕉、伊賀の国上野（三重県上野市）で生まれる。

1653年 伊達政宗の妻、田村氏愛姫（めぐひめ）没。松島に葬る。五郎八姫（いろはひめ）、富山観音堂修復。

1659年 雄島に松吟庵建つ。

1661年 五郎八姫没。松島に葬る。

1682年 大淀三千風、「松島眺望集」刊行。

**1689年 5月6日 芭蕉、松島を訪れる。**

**1694年 「奥のほそ道」刊行される。芭蕉、大阪にて没。51歳。**

1731年 伊達吉村の命で、五大堂500年ぶりに開帳される。

1732年 雄島に見仏堂建てる。

1747年 雄島に芭蕉句碑「朝よさを」建つ。

1772年 仙台藩官撰、「封内風土記」完成する。

1786年 菅江真澄、松島訪問。

1789年 雄島北端に芭蕉奥の細道碑建つ。

1808年 雄島に曾良句碑建つ。

1823年 舟山万年、「塩松勝譜」で松島四大観を設定。

1851年 鐘楼下に奥の細道碑建つ。

1868年 明治元年 廃仏毀釈運動始まる。瑞巖寺の苦難が始まる。

1876年 明治天皇行幸。瑞巖寺上々段の間に宿泊。1000円が下賜され、修理が開始される。

1884年 9月15日 東北開発の最大プロジェクト、野蒜築港、台風のためにとん挫する。

1893年 正岡子規、来松。

1895年 乃木希典、南天棒に参ず。

1908年 大正天皇、来山。北上川改修で川底から出た檜で造った埋木書院、仙台に完成。

1912年 明治天皇崩御。乃木希典夫妻殉死。南天棒、「バンザイバンザイ」の弔電を乃木宛に出す。

1919年 雄島薬師堂、焼失。

1927年 宮城電鉄、松島海岸駅まで開通。水族館開設。

1931年 齋藤茂吉、来松。

1943年 埋木書院、瑞巖寺に移築。

1945年 仙台空襲により、瑞鳳殿焼失。松島空襲。第2次世界大戦、終戦。

1947年 昭和天皇行幸、埋木書院にて休憩。

1955年 第1回芭蕉祭。

1975年 高村光雲作観音像、宝物館へ。（光雲は光太郎の父、東京芸大教授）

1983年 雄島松吟庵再度、焼失。

1987年 NHK大河ドラマ「独眼竜正宗」大ヒットし、松島の観光客も増える。（ピーク時、年間600万人）

1989年 俳聖松尾芭蕉 奥の細道三百年 瑞巖寺年間120万人の入山（独眼竜正宗の時が110万人）

2004年 NHK朝の連続ドラマ「天花」のヒロインの恋人が瑞巖寺で修行中の設定

（参考）松尾芭蕉「奥の細道」

仙台発 塩竈 松島 鳴瀬町 矢本町 石巻 河北町 津山町 登米町ルート概念図

「奥の細道」松島から石巻までの原文（ふりがなは安倍）

十二日、平和泉（ひらいずみ）と心ざし、あねはの松、緒だえの橋など聞傳（ききつたえ）て、人跡（じんせき）稀に雉兔（ちと）菊□（すうぜい）の往（ゆき）かふ道、そこともわかず、終（つい）に路（みち）ふみたがえて石の巻といふ湊（みなと）に出（いず）。こがね花咲（さく）とよみて奉（た）る金花山（きんかざん）海上に見わたし、数百の廻船（かいせん）入江につどひ、人家、地をあらそひて、竈（かまど）の煙立（たち）つゞけたり。思ひがけず斯（かか）る所にも来れる哉と、宿（しゆく）からんとすれど、更に宿（しゆく）かす人なし。漸（ようよう）まどしき小家（こいえ）に一夜をあかして、明（あ）くれば又しらぬ道まよひ行（ゆく）。袖のわたり尾ぶちの牧（ま）まの萱（あ）はらなどよそめにみて、遥（は）なる堤（つ）を行。心細き長沼（ながぬま）にそふて、戸伊摩（といま）と云所に一宿して、平泉（へいせん）に到る。其間、廿余里（にじふり）ほどおぼゆ。

「奥の細道」松島から石巻までの原文現代語訳（安倍）

12日。金色堂で有名な平泉に行きたいと考えて、姉齒の松・緒絶の橋を有名なところを聞いていたので、そちらにも行ってみたいと思いながら人の通った跡もよくわからないような獺師や木こりしかあるかない道を、どこへ通じるとも知らないまま、たどっていったら、道に迷ってついに石巻というところに出てしまった。大伴家持が東北から金が出たことを喜んで万葉集に「すめろぎの御代栄えんとあずまなるみちのく山に黄金花咲く」と詠んで天皇に奉った金華山を遙か遠く海上に見えた。数百の回船が石巻湾にあり、人家が沢山見えた。また家々の竈からは煙が立ち上っているのが見えた。

しかしそれにしてもけもの道を通ってきたのに、こんなに繁栄している場所に思いもかけず来てしまったものだなあ、と感慨を覚えたものだ。そして一夜の宿を借りようと頼んでみたが、泊めてくれるところはなかった。ようやく貧しい小さな家に一泊して、次の日にまた知らない道を迷いながら進んだ。

袖の渡り・尾ぶちの牧・真野の萱原などを遠くに眺めながら、遙かに続く堤の上の道を歩いた。心細くなるほど寂しい長沼という場所を通り過ぎて、登米という場所で一泊して、平泉に至る。その間は約20里ほどだった。

